

堀  
辰雄

# 恢 復 期





恢  
復  
期



## 第一部

彼はすやすやと眠っているように見えた。——それは夜ふけの寝台車のなかであつた。……

突然、そういう彼が片目だけを無気味に開けた。

そうして自分の枕まくらもとの懐中時計を取ろうとして、しきりにその手を動かしている。しかしその手は鉄のよ

うに重いのだ。まだその片目を除いた他の器官には数時間前に飲んだ眠り薬が作用しているらしいのである。そこで彼はあきらめたようにその片目を閉じてしまふ。

が、しばらくすると、彼の手がひとりでに動き出した。さっきの命令がやっといまそれに達したかのように。そうしてそれがひとりで枕もとの懐中時計を手搜りてさぐしている。その動作が今度は逆に、彼自身ほとんど忘れかけていたさっきの命令を彼に思い出させる。

「まだ三時半だな……」

彼はそうつぶやくと、一つ咳せきをする。するとまた咳が

出る。そうしてその咳はなかなか止みそうもなくなる。まだ一時間ばかり早いけれども仕方がない。もう起きてしまおうと彼は思った。——彼は上衣に手をとおすために身もだえするような恰好かつこうをする。やっとそれを着てしまうと、半年近くも寝間着でばかり生活していた彼には、どうもそれが身体からだにうまく合わない。ネクタイの結び方がなんだかとても難かしい。靴を穿はこうとすると、他人のと間違えたのではないかと思うくらいだぶだぶだ。——そういう動作をしながら、彼はたえず咳をしている。そのうちにそれへ自分のでない咳がまじっているのに気

がつく。どうも彼の真上の寝台の中でするらしい。おれの咳が伝染ったのかな。彼は何気なさそうに自分の足もとに揃そろえてある一組の婦人靴を目に入れる。

彼はやっと立上る。そうしてオキシフルの壇びんを手にしたまま、ステイムで蒸むされている息苦しい廊下のなかを歩きだす。鞄かばんにつまずいたり、靴をふんづけそうになる。一つの寝台からはスコッチの靴下をした義足らしいのが出ていて彼の邪魔をする。そんなごった返しの中かを、彼はよろよろ歩きながら、まるで狂人かなんぞのよううに眼を大きく見ひらいている。……



そのときふと彼は、そういう彼自身の痛ましい後姿うしろすがたを、さつきから片目だけ開けたまんま、じっと睨にらみつけている別の彼自身に気がついた。その彼はまだ寝台の中にあつて、ごたごたに積み重ねられた上衣やネクタイや靴のなかに埋まりながら、そしてたえず咳をしつづけているのであつた。

夜の明ける前、彼はS湖で下車した。

そこからまた、彼の目的地であるところの療養所のある高原までは自動車に乗らなければならなかつた。途中

で彼は、その湖畔こはんにある一つのみすぼらしいバラック小屋の前に車を止めさせた。そこには、もと彼の家で下男をしていたことのある一人の老人が住んでいた。その老人はもう七十ぐらいになっていた。そうしてもう十何年というもの、この湖畔の小屋にまったく一人きりで暮しているのだった。ときどき神経痛のために半身不随になるということを聞いていたが、そんな時は一人でどうするのだろうか、その老衰した様子を見ながら彼は思った。「それにしても、なぜこんなにまでなりながら生きていなければならぬのかしら？」　そういう今の自分には

よく解わからないような疑問がふと彼の心を曇らせた。

そのバラック小屋の窓からは、古画のなかの聖母の青衣のような色をした、明けがたの湖水が、ほんのりと浮んで見えた。——老人はいつか彼の前に古びた聖書を開いていた。そうして彼のために熱心な祈きとうを祈きとうしだした。

だが彼はそれには別に耳を貸そうともしないで、ただ不思議そうに、老人の手にしていた聖書の背せがわ革わが傷いたんでいると見えて一面に膏こうやく藥やくのようなものが貼はってあるのや、その老人のぶるぶる顫ふるえている手つきが何となく鶏の足に似ているのを眺めていた。そしてその二つのものは聖

書の文句よりも彼の心に触れた。まるで執拗しつような「生」そのものの象徴でもあるように。

療養所はS湖から数里離れたところのY岳の麓ふもとにあった。

そうしてその麓のなだらかな勾配こうばいに沿うて、その赤い屋根をもった大きな建物は互に並行した三つの病棟に分れていた。それにはそれぞれに「白樺」とか「竜胆りんどう」とか「石楠花しゃくなげ」などと云う名前がついていた。彼の入った「白樺」の病棟はY岳の麓にもっとも近く、そこには他

の患者もあまり居ないらしく、そしてその裏側はすぐ一面の雑木林になっていた。彼の病室からはベッドに寝たまままで、開け放した窓をちようどよい額縁にして、南アルプスのまだ雪におお掩われているロマンチックな山頂が眺められた。

彼の病室には南向きの露台が一つついていた。そこか  
らならばS湖も見えるかも知れないと思つて、そこまで  
出て行つた彼はそれらしい方向には一帯の松林をしか見  
出さなかつた。が、その代りに彼はそこから、下の方の  
病棟のあちらこちらの露台に裸かの患者たちが日光浴を

している有様ありさまを一日に見ることが出来た。みんな樹皮の  
ような色の肌はだをしながら、海岸でのように愉たのしそうに腹はら  
這ばいになっていた。

彼の想像はそういう人たちと同じように日光浴をして  
いる裸かの彼自身の姿を描いた。そして「わが骨はこと  
ごとく数うるばかりになりぬ」そんな文句を彼はふとつ  
ぶやいた。それはかの老人が彼のために読んでくれた聖  
書の中の一句だった。いちばん何でもないような文句を  
覚えていたものと見える。「わが骨はことごとくか……」  
それはいつの間にか話し相手のない彼の口癖くちぐせになってし

まった。

夕方になると、彼はひどい疲労から小石のように眠りに落ちた。

それから何時間たったのか覚えはなかったけれど、彼が目をさまして便所に行ったのは、だいぶ深夜らしかった。彼は便所から帰って、一種の臭いにおのただよっている病院の廊下を、同じような病室をNO.1から一つずつ丁寧に数えて歩いて来ながら、さて彼の病室である四番目のやつのドアを開けようとして、ひよいと部屋の番号を見たら、それはNO.5だった。彼は部屋の勘定を間違え

たのだと思つて、すぐ廊下を引き返した。が、ひとつ手前の部屋に来て見るとそれはNO.3 になつていた。おれは何と寝呆ねぼけているのだらう。自分の部屋の前を何遍なんべんも素通りする。そう思つてまた踵かかとを返した。が次の部屋まで来て見るとやっぱりさっきのNO.5であつた。まさかお伽噺とぎばなしじゃあるまいし、おれが夜中に起きて便所へ行つている間におれの部屋がどこかへ消えてなくなつてしまつているなんて!……そうは思つたものの、彼はしばらくの間、電燈ばかりこうこうと耀かがやいている深夜の廊下のまん中に愚かそうに立ちすくんでいたが、ふと



そこにただよっている臭いが過酸化水素の臭いだと気づくが早いか、彼は彼の部屋のドアの外側の把手には、なぜだか知らないけれど、ガアゼの繃帯ほうたいが巻いてあったことを突然思い出した。そうして彼は、彼が何遍もその前を往復したNo.5の部屋のドアの把手がその通りであることを認めた。おれはこのおれの手でさつきそれを握りながら今までこいつに気がつかなかったとは何事だい！（そこで彼は思いきってそのドアを押し開けた。）やっぱりおれの部屋だ。空からっぽのおれがおれを待っている。夕方、おれがそこら中に脱ぎ棄てておいたがいと外套や上衣や

襯衣シヤツや、それから手袋や靴下のようなものまでが、みんなそれぞれにおれの姿を髣髴ほうふつさせている。……

彼はやつとこさ自身のベッドにもぐり込みながら、今しがたの変な錯誤をゆっくりと考え直した。——つまり、病院にはNO.4なんて部屋は始めからないのだ。4は不吉にも死と暗合するから。で、おれの部屋は四番目であるのだけれど、しかも5という番号がつけられている。ただそれきりなのだ。……だが待てよ、その厄介やっかいな番号をもった部屋をすっかり持て余してしまったこの病院の建築師は、ひよっとしたら一種の魔法のようなもので、

この隣りのおれの部屋にそれをすぼっと嵌<sup>は</sup>めておいたかも知れないぞ。そうしてその二重の部屋（つまりこのおれの部屋だが）、それは夢と現実とをくつつけたように、どこかですこしずつ喰い違いを生じている。そうだ、こんな夜ふけなどあの露台に出てこっさり窓の外からこっちを覗<sup>のぞ</sup>いて見ると、ちようどあの重屈折をする方解石<sup>ほうかいせき</sup>のようなものを通して見たかのように、この部屋の中のもの<sup>の</sup>がすべて、そしておれ自身までがぼんやり二重になつて見えそうな気がする。

そのとき不意に前夜の寝台車の中のごたごたとした光

景が彼に思い出された。いつまでも奇妙な半睡状態を続けていた自分の身体からすうっと別の自分自身が抜け出して列車の廊下をうろろと歩いている——そういう前夜の錯覚と、それから今しがたの変な錯誤とが何時しかごっちゃになって、なんだかウイリアム・ブレイクの絵の或る複雑な構図と同じような不可解さをもって彼に迫りながら、ますます彼を眠りがたくさせた。

（二三日後の夜、彼は彼の部屋のドアの把手に人間の手みたくに巻いてあるガアゼの繃帯に内部から血のにじみ出ているのを認めた。しかし翌日になって見ると、彼の

知らない間にそれは新しいガアゼに取換えられてあつた。）

そういう神経質な最初の一夜を例外にすると、そこへ入院してからの彼の病状はずっと順調であつた。高原の春先きの気候とともに。

彼の病室の窓から眺められる南アルプスの山頂には雪が日ごとにまばらになつて行つた。そしてそれらは遂ついにに何かしら地球の歯のようなものを剥むき出しながら、彼の窓に向つて次第に前進してくるように見えた。病人はそ

れを飽かずあに眺めた。

だが、ある朝から急に雪が降りだした。そして一日じゆう小止おやみなく降っていた。もう四月下旬だというのに何と云うことであろう。そしてそれはその翌日になっても、翌翌日になっても止まなかつた。

そんなある夜ふけのこと、あたりがあまりに騒々しくなつたのでそれまでうとうとと眠っていた彼は思わず目をさました。眠る前にいくらか小降りになつたかと思われた雪はいつしか吹雪ふぶきになつていた。その上に突風がそれに加っているらしい。——そんな夜も露台に向いてい

るドアや窓は医師の命令で細目に開けておく習慣だったので、それらの隙間すきまからは無数の細かい雪が突風そのものと一緒に吹き込んできて、そこら中に手あたり次第に汚点をつけながら、彼の病室の中をくるくると舞っていた。……彼はそつと眼だけを毛布のそとに出しながら夢心地にそれを見入っていたが、やがてそれらの活潑に運動している微粒子の群はただ一様に白色のものばかりでなく、それらのなかには赤だの青だの黄だの紫だのがまじっていて、それらが全体として虹色にじいろになって見えることに気がついた。その瞬間、彼はちよつと軽い眩暈めまいを

感じはしたが、それでもなおその回転する虹に見入っている、それがいつしか彼に子供の頃のある記憶を喚よび起させた。……

人が子供の彼のために幻燈を映してくれようとしてい  
る。彼は闇の中をじっと見つめている。レンズがなかなか  
合わない。その間、たださまざまな色彩の塊かたまりがぼ  
んやり白い布の上にさまよっているばかりである。けれ  
どもある期待のために子供は胸を躍らせている。うっと  
りするような瞬間が過ぎる。やっとレンズが合い、絵が  
はつきり見えだす。そこには雪のなかに一人の死んだ



支那兵が倒れている。子供はその凄惨な光景に思わず目を掩おおってしまふ。……

その子供のおれを、一瞬間うつとりさせていたのと同じような現実の罨わなが今のおれを落とし入れようとしているのだろうか？ おれは何かに瞞だまされているのではないか？——そう思いながら彼はなおも魅せられたようにその虚空に回転する虹に見入っていたが、そのうち突然、どこかでガチャリ！ と硝子の破れる音がした。と同時にあちらでもこちらでもそれと同じような物音が起った。ずいぶん沢山の硝子が破れたらしいな……と思う間

もなく、彼の耳は彼自身のすぐ身ぢかに起つたらしいそれよりも数倍も大きな音響のために麻痺まひしたようになってた。それは彼の部屋のなかで起つたものらしかったが、彼はそれを確めようともせず、頭にすっぽりと毛布をかぶってしまった。そして彼は枕もとに用意してあるヴエロナアルを飲もうとしたけれど、このまま何も知らずに眠ってしまったことも恐しかった。それからどのくらい時間がたったか分らなかつた。——ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタ

アの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしだすのと同時にそれらの幻覚も一時に消えてしまった。それは明らかに眠りではなかった。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

本当の眠りはただその発作を長びかせるような作用をした。

彼がそういう一種の仮死から蘇よみがえったのは翌朝の十時頃だった。もう風はすっかり止んでいたし、露台を四五寸埋めている雪からは水蒸気がさかんに立ちのぼっていた。そのせいばかりでなく、その露台の眺望は、いつも

彼のベッドの上から見えるのとは非常に様子が異っていた。そしてそれが、彼の病室の窓硝子が跡方もなく破壊されているからばかりでなしに、その露台に通じているドアがその蝶番ちょうつがいごとそっくり剥はぎとられてしまっているためであることに彼はやっと気がついた。硝子の破れる音は彼もうつつに聞いて知っていたが、あんなに巖がんじょう畳じようだったドアがこんなにまで破壊し尽されたことを昨夜少しも知らずにいたことが彼を気味わるがらせた。

南アルプスの山頂はまた一面に真白になりながら、いつの間にか彼の窓からずっと後へ退すさっていた。それを眺

めながら、彼が自分のいま生きていることを確かめでもするようになり、彼のもじやもじやになった髪の毛へひよいと手を触れたら、その一本一本が神経そのものであるかのように痛んだ。

彼は眠ることが出来なくなった。

どうも夜中になると熱が出てくるらしい。ちよつと眠ったかと思うとすぐ汗みどろになって目がさめた。朝の体温が三十八度ぐらいで一日のうちの最高で、それから次第に下って、夕方には最低三十七度ぐらいになった。

熱の系統が普通とは逆であつた。しかもそれがかなり秩序立っていた。夜、眠れないのはどうもそのせいらしいか  
つた。

毎晩、十二時頃になると看護婦たちが彼の病室に見舞  
いにきた。彼はからかい半分彼女たちのことを「鳩はとぽっ  
ぽ」と呼んでいた。それは看護婦たちが鳩の歩き方を真  
似しているような恰好かっこうをして廊下を歩いてくるからだつ  
た。そうして看護婦たちは彼の病室のドアをすうつと音  
のしないように開け、しばらく室内の様子をうかがいな  
がら闇のなかに彼が眠っているらしいのを確かめると、ま

たすうつとドアを閉めて、再び鳩のような足どりで廊下を立去った。看護婦たちのなかにはドアも開けずにその鍵孔から彼の様子を覗いて行くものもあった。そんな時刻にはいつもまだ眠れないでいるところの彼は、そういう看護婦たちの行動を一つ一つ手にとるように知ることが出来た。また、それまでうとうと眠っているような場合でも、きつとそのへんな凝視を彼は神経に感じて目をさましてしまうのが常であった。そういうとき彼はびっしより汗をかいていた。彼は看護婦たちの立去るのを待ってすばやくタオルの寝間着を裏がえしにした。――だ

が、そのうちにその深夜の訪問は十二時に限らず行われるようになった。ずっとその時刻の過ぎた夜中の二時か三時になって、まだ眠れずにいる彼はドアがひとりでに開いたり閉じたりするのを見た。誰かが鍵孔からじっと自分の様子をうかがっているのを感じた。しかもそれは一晩のうちは何回となく繰り返された。彼はそのたびごとにぞつとしながら、いつも眠った真似をしていた。そんな時彼の神経過敏になった耳は、どうかすると夜ふけの廊下に何かの翼の音のするのを聞いたりした。

しかし彼はその子供らしい恐怖を誰にも訴えなかつ



た。彼はその不眠と熱のためであるらしい幻聴に彼自身を馴ならそうとした。そして子供たちが「鳩ほつほ」で遊ぶようにそれで遊ぼうとしていた。——だがある朝、院長は、彼に彼が肋膜炎ろくまくえんを再発していることを告げた。そして彼が夜ふけの幻聴のように聞いていた何かの翼の音は彼自身の胸の中から起るものであることを知らされた。

彼は夜ごとに不眠に馴れていった。彼はむしろ夜眠ることを欲しなくなった。眠ることは、彼には、ただ寝汗をかくことであつたし、そのあとで高い熱の、きつと出

るような悪夢を見ることに過ぎなかつたから。だが彼は、不眠のまままで、眼をあけたまままで見てしまふ恐しい夢はどうすることも出来なかつた。……そんなある夜に見たところの一つの夢であつた。いつもは開けておくはずの窓をどうしてだかその夜は閉めておいたと見える。そとは月夜らしく、その閉じた窓の隙間から差しこんでくる月光が彼のベッドのまわりの床の上に小さい円い斑点はんとんをいくつも描いていたが、それはまるで彼自身がそこへ無神経にしちらした痰たんのように見えた。そういう変な光線のなかで、彼はふと彼の枕もとに誰かがうな垂だれている

らしいのに気づいた。ああ、Aが来てくれたな……（その瞬間Aがだれか別の人間に変わってしまった）……おお、Bだったのか、すまないな、Aとまちがえて。……おや、君はBでもないね、Cだったのかい……そんな風に、彼の枕もとにうな垂れているのは一人の男きりだったが、その男が誰だかやっと思当がつきそうになると、それはすぐ他の男に変わってしまった。相手の男がいつのまにか他の男に変わっているようなことは、どんな夢にもよくあることで、そういう不思議な変化も大概の夢ではきわめて自然に感じられるものである。それが彼のその時の夢

ではそう行かなかつた。その不思議な変化がどこまでも不思議で、その上それが一種の凄気せいきのようなものをさえ感じさせるのだつた。……そんな具合に彼が彼の知つていると思われるあらゆる友人たちを代る代る夢に見つくしてしまつた時分になつて、彼はやっとその一見何でもないうような、それでいてこの頃の彼の夢の中では、最も彼を苦しませたところの夢から自由にされた。熱がひどく出ているらしい。彼はそれを測るために検温器を取ろうとした。だが、その検温器は彼の手から滑つて床の上で真二つに折れてしまつた。その瞬間、いままで窓の隙

間から差しこんでくる月影だとばかり思っていたそこから  
中の沢山たくさんの斑点が、突然、彼の目に真赤まっかに映った。そしてそれが本物の痰のように見えた。——おや、おれは何  
時の間にこんな血を吐いたのかしら？……彼は気味悪そ  
うにそれから目をそらしながら、なんだかこのまま自分  
が死んで行くのではないかという気がされてならなかつ  
た。そうして彼は、今しがた夢の中で彼を苦しませたと  
ころの友人たちが、彼の死を知らせる電報を手にしたま  
ま、さまざまに驚愕きょうがくしている有様を、一つ一つ病的な  
好奇心をもって描きはじめていた。……

彼がその何回目かの彼の「危機」から脱するためには、四週間たっぷりの絶対安静を要した。

六月に入ってから、ある日のこと、彼ははじめて露台に出ることを許された。彼はそこから見えるあらゆる樹木がすっかり若葉を出しているのに眺め入りながら、目が痒<sup>かゆ</sup>くなるのを我慢<sup>がまん</sup>していた。それらの樹木の多くが白樺と落葉松<sup>からまつ</sup>であることを知ったのもほとんどその時が始めてであった。

熱は体温表の上で一時非常にジクザクな線を描いた

が、そのジクザクは次第にその振幅をちぢめて行きなが  
 ら、遂に完全に赤線（三十七度）以下になった。だが、  
 彼の身体はからだまだどことなく不安定だった。そしてひつき  
 りなしに身体のあちらこちらに、ちようど大地震のあと  
 に起る無数の小さな余震のように、あるいは頭痛が、あ  
 るいは神経痛が、あるいは歯痛が次ぎ次ぎに起った。彼  
 はそれらの余震になおもおびや怯かされながら、しかし次第  
 に、露台のまわりでうるさいくらいキーン嘖りだした小鳥た  
 ちの口真似くちまねをしてみたり、裏の山から腕うでいっぱい花を抱  
 えて帰ってくる看護婦に分けて貰もらって葉くすりびん罌にさした

竜胆りんどうや鈴蘭すずらんなどの小さな花の香りかおをかぎながら、彼は生きとした呼吸をし出した。

ある日から彼も日光浴をすることになった。

彼は看護婦から紫外線除けの黒眼鏡くろめがねを受取ると、それをすぐに掛けながら子供のようにいそいそと露台に出て行った。そして彼は初夏の太陽をまぶしそうに見上げながら、それに向って話しかけでもするように独語するのであった。

「おお、太陽よ、おれも昨日までは苦痛を通して死ばかり見つめていたけれども、今日きょうからはひとつこの黒眼鏡



を通してお前ばかり見つめていてやるぞ！」

## 第二部

その後御病氣御順調の由、何よりも結構です。

もしお身体からだにお差障さしさわりないようでしたら当分こちらへ

来て見ませんか。今年ことしは西洋人の別荘を借りています。

私一人きりですからどうぞ御遠慮なくお出でください。

うちの寝台はぎいぎい鳴りますすけれど。庭には沢山あな

たの好きな羊歯しだが生えていますよ。（しかしこれはうちの撮とったものではありません。）

七月の初めに、軽井沢に行っている彼の叔母おばから、美しく密生した羊歯ばかりを撮影した絵葉書が、まだ療養所にいる彼のところへ届いた。彼はすぐそれに返事を書いた。

絵ハガキを有難う。

僕はすぐにでも叔母さんの「羊齒山莊」へ行きたいのですけれど、院長がまだ許してくれません。でもあと一週間ぐらいしたら僕と院長と約束をしました。それまで僕はせっせと日光浴でもしていきましょう。僕は足ばかり出しているものだから、なんだかマホガニー製の義足でもしているようになりました。左様なら。

七月も末になったある朝、その「羊齒山莊」に突然、彼は、西洋人の好んで着るような派手な柄のスウェタアかなんぞ着込んで、妙にはしゃいだ姿をあらわした。手

には籐とうのステッキを持っていきり、どこか散歩からでも帰ってきたような恰好かっこうであった。——雑草が生いかぶさるようになっていゝ小径こみちの両側には、とりわけ羊歯がみごとに生長していたが、それが彼にはあたかも可愛らしい手をひろげて自分を歓迎している子供たちのように見えるらしく、彼を微笑ほほえませていた。……

その奥まったヴェランダに、彼の叔母がひとりで籐とう椅子いすに凭よりかかっているのを認めると、

「叔母さん……」

そう彼は人なつこそうに元氣のいい声をかけた。

「……そうしているところはまるで羊歯の女王みたいで  
すね」

「そう見えて？……女王なら、私は何の女王でもいいわ」  
叔母さんは彼ににっこり笑って見せた。

彼は靴のままヴェランダに上って、そこにある籐椅子  
の一つにどっかかり腰を下した。そうしてすこし荒い呼吸  
づかいをしていた。

「お疲れになったでしょう。すぐお寝やすみにならない？」

「ええ……叔父さんは？」

「ずっと東京よ……また瘦やせっぱちが二人寄ってたかつ

てきつと笑うことよ」

「ふ、ふ、僕もここへ来る途中で考えたんですがね……」  
「……………?」

「あのね、昔はそれでも、叔母さんと僕とで目方を合せると叔父さんのよりは五<sup>キロ</sup>疋ぐらい多かったですでしょう。でも、もう駄目なの。……僕はあの頃から見ると五<sup>キロ</sup>疋はたつぷり減ってしまったからなあ」

「そのかわり、叔母さんはすこし肥<sup>ふと</sup>ったでしょう?……」

そう言われても、彼はもう叔母さんの方を見ようとも

しないで、元氣なくじっと目をつぶっていた。……

その羊齒しだの密生している叔母の別荘には、去年まではスコットランド人らしい老夫婦がいかにも品よさそうに暮っていた。毎年の夏、彼は散歩の折などこのへんの草深い小径こみちが好きでよくこの家の前を通ったものだが、そのたびごとにいつもその老夫婦がヴェランダに出て黙ったまま、お茶かなんか飲み合っているのを見かけたものだった。なんでも三十年近く日本で宣教師をしている人だそうだが、そんな宣教師というよりもむしろ哲学者か

なんかのように見えた。この高原のどんな小徑にでも勝  
 手な名前をつけたがる西洋人に倣ならって、彼もこのへんの  
 小徑を自分勝手に *Philosophen Weg* と呼んでいたくら  
 いだったのに。……あの老夫婦もとうとう彼らの任期を  
 了おえて故国にでも帰ったのかしら。——そう云えば、こ  
 の老夫婦が他の亞米利加アメリカの宣教師たちと異って、いかに  
 も趣味のいい、そして地味な暮し方をしていたらしいの  
 は、彼等が彼等に代ってこの別荘に入るであろう人たち  
 ために残して行った幾つかの古びた家具類、——たとえ  
 ば大きな寢台とか、がっしりした食卓とか、稚拙ちせつな彫り



のある椅子などを見れば分かる。どれもこれも三十年ぐ  
らいはごく注意して、傷一つつけずに、使い通してきた  
ものらしい。たとえ異国であろうとも、こんな風にごく  
上等な品物をごく長い間使い慣らしていた老人たちの心  
柄は、ただ質素であると云ってしまふにはあまり奥床おくゆかし  
く思われる。——彼はそれらの家具類の間にちよこんと  
している一つのごく小さな椅子に、ちようど五六歳の子  
供にしか掛けられないような一つの椅子にふと眼を止め  
た。その小さな椅子は木質の古びと云い、それに彫られ  
てある模様の稚拙な感じと云い、いずれも他の古椅子と

あまり変らなかつた。これはひよつとすると彼らが三十年前スコットランドから日本へ移住して来た時他の家具類と一緒に向うから持ってきた物かも知れない。そのとき彼らにはちようど五つか六つぐらいになる子供が一人あつたのだらう……だが彼はこれまでついでぞそういう彼らの息子むすこらしいものを見かけたことはなかつたけれど……その息子、と云つても今ではもう三十以上になつているに違いないが、彼は自分の職業のために一人で故国に帰っていたのだらうか、それとももしかしたらもう死んでしまつているのであるまいか？……いずれにせ

よ、この可憐かれんな椅子がそれを見るたびごとに彼ら老夫婦の心を慰めていたであろうことは容易に想像される。そうしてこの別荘を立去る時、その老夫婦はこの椅子一つのためにどんなに心をなやましたことであろうか？

……それらの古びたいくつかの家具がしめやかに語りだすところの、そう云うロマンチックな物語に耳を傾けながら、それらの語り手の一人である、すこし彼には大きすぎる寝台の上に、到底眠れそうもないと思いながら横になっているうちに、彼はいつしかやすやすと寝入った。……

夕飯のときである。彼は叔母と一しよに食堂の、それひとつあれば七八人ぐらいのお客には充分間に合いそうな、大きな円卓まるテエブル子につこうとして、さして、それがあんなり大きすぎるので、どこへ坐すわったらいいかまごまごした。

「どうも具合が変だなあ……」

「すこし遠くても、向い合って坐った方がよくってよ。……でも、二人になったから、これでもまだ恰好がつかのよ。私一人のときは、ほんとうに持て余してしまっ

た……」

彼は彼女の云うとおりに彼女と差し向いに坐った。しかし、卓子の向側とこちら側で話し合うには、よほど大きな声を出さなければ聞えないような気がした。そこで彼は食事の間だけ沈黙することにした。そのかわりに彼は食事をしながら、その食卓掛けのよく洗濯せんたくしてあるけれど色がひどく剥はげちよろになっているのや、アルミニウムコオヒイわかの珈琲沸りっぱしの古くて立派りっぱだけれどその手がとれかかっていると見えて不細工に針金でまいてあるのや、どれもこれもちぐはぐな小皿に西洋草花が無邪気に描かれて

あるのやを一々丁寧に眺めまわしていた。これらの物もみんな前の老夫婦が置いていったものらしい。……

そのとき彼は、例の子供の椅子に関する彼の意見を叔母に話したい欲望を感じた。探偵小説ばかりを読んでい  
るせいか、他人の身の上などを空想することの好きな叔  
母はことによると彼よりもっと細かな観察をしているか  
も知れない。彼はしかしそれを言うのを止めた。彼には  
卓子の向側にいる叔母に向って普通より大きな声で話し  
かけなければならぬのが物憂ものうかつたのだ。

一種の神経衰弱に罹<sup>かか</sup>ったところの病人は、二日も三日も平気で眠りつづけると言われる。数年前、彼はその軽いやつに罹ったことがあった。——その時の症状が思い出されてならないほど、この頃の彼はひっきりなしに眠たい。すこし我慢して起きっていると眠気で床の上に倒れそうになる。病院での睡眠不足を一時に取戻そうとするがごとくに彼は眠りつづける。その病院では看護婦たちに持て余されたくらい神経質になった彼は、ここまでは——このしつとりした落着きのある山荘のなかでは、そうして彼の叔母のクラシツクな愛のなかでは、彼はま

るで母親に抱かれた子供のよう<sup>に</sup>前後を知らず深い眠りに落ちた。事実、彼はここへ来てからもう何日になるのか、十日になるのか、二十日になるのか、それとも一週間<sup>に</sup>しかならないのか、それすら思い出せない。そうして昨日のことが一昨日のことより昔のよう<sup>に</sup>に思える。

叔母のところへは毎日のように彼女と同年輩ぐらいの女の客が訪れてきた。そういう女客ばかりが二三人一しよに落ち合うようなこともあった。「みんな私の学校友達なのよ」叔母はそう言っていたが、いずれ叔母に聞いてみればそれぞれ由緒ゆいしよのある貴夫人たちなのであろうけ



れど、そういう貴夫人たちというものはどんな会話をするものかしらと、一度二階の彼の寝室からじつと耳を傾けて聞いていると、自分の別荘の裏の胡桃くるみの木に栗鼠りすが出たとか、野菜がどうだとか、薪まきがどうだとか、そんな話ばかりしているので彼はひとりで苦笑した。

そういう時には、彼は誰にも見つからないように、二階から降りてこっそりと台所の裏へ出て行った。そこには落葉松が繁茂はんまいしていて涼しい緑蔭をつくっていた。彼はいつもそこへ籐とうの寝椅子を持ち出してごろりと横になった。そこからはよく伸びた落葉松のおかげで太陽がま

るで湖水の底にあるように見えた。どうかすると彼はそこでそのまま眠ってしまったこともあった。

そんな日のある日、もう客が帰った跡と見えて、その裏庭に面したフレンチ・ドアに叔母がぼんやり凭りかかっているのを見つけると、

「叔母さん」

と彼はその寝椅子の中から声をかけた。

「ここにこうしていますとね、僕はきつとドロシイのこ  
とを思い出すんですよ……どうしてかしら？」

叔母さんはまだぼんやりしている。よほどお疲れにな

つたと見える。

「ドロシイは今年は来ていませんかの？」彼はうるさく質問するのである。

「ドロシイさんの家は何でも去年カナダへお帰りになつたそうよ」

「そうですか。——おや、おや、僕は年頃のドロシイが見たかったんだがなあ……」

……数年前、彼はそのドロシイの隣りの別荘に一夏を暮したことがあった。やはり叔母と一しよに。——その

頃ドロシイはまだ七つか八つぐらいであった。彼はときどきそのドロシイや彼女の小さな妹たちと一しよになつて遊んだ。ドロシイは綺麗な女の子で彼女の美しい名前によく似合っていた。日本語も上手だった。しかし彼と話をしているうちに日本語が分からなくなると英語でしゃべった。そうして英語などで人としゃべったことのない彼をちよつと黙らせた。そういう時いつまでも彼が黙っている、彼女は何だか困ったような真面目な表情で彼を見上げるのであった。彼はそういう表情を美しいと思つた。——ある時、彼はドロシイとその小さな妹とを連

れて、オルガン岩のほとりへ散歩に行った。その散歩の間、ドロシイは絶えずはしゃいでいたが、その帰途、突然一つの小さな崖がけの上へよじのぼってしまった。それは彼女によじのぼることはどうにか出来ても、そこから下りてくることは危険に思われるほどの急な傾斜だった。どうするだろうと思っ  
て見ていると、ドロシイはちよつとその傾斜を見て首をかしげているが、いきなりそこを駆け下りてきた。あぶない！と彼が叫ぶのとほとんど同時に、彼女は途中で足を滑らしながら、彼の足もとへもんどり打って落ちてきた。……しかし彼女はすぐ起き上

った。見ると彼女の白い脛はぎには泥がつき、何かで傷つけたらしく血が滲にじんでいた。彼女はしかしそれを見ても泣かず<sup>に</sup>にいた。ともかくもすぐそのホテルまで連れて行って何とかしてやろうと思いつながら、その怪我けがをした少女とそれからもう歩き疲れているらしいその妹とを二人、両手に引張ってホテルに向って歩いてゆく彼の方がよほど気が気でなかった。そのうち彼はこりや俺の方がすこしあやしいぞと思いつ出した。……彼はどうかした機会に、血を見ると、それが自分のであるろうと、他人のであるろうと、すぐ脳貧血を起してしまふ癖があった。そう

して今も今、彼はドロシイの白い脛に薔薇<sup>ばら</sup>色の血が滲み出ているのを見ているうちに、どうやらそいつを起したらしいのである。彼はホテルの玄関の次第に近づいてくるのを、うるさく顔にまつわりつく蜘蛛<sup>くも</sup>の巣のようなものを透して、やっとのことで見分けていた。……

「ブランデー！ ブランデー！」

一人の西洋人がそう叫んでいるらしいのを彼はすぐ顔の近くに聞いた。それから彼は、自分がホテルの床板上にあおむけに倒れながら、誰かに自分の足を宙に持ち上げられているらしいことに気がついた。それと同時に

甘ったるいような香水のかおりを彼は嗅いだ。彼を介抱かいほうしてくれているのは西洋人の夫婦らしかった。

「ブランデー！」

彼の足を持ち上げていてくれるその西洋人は、ようやく意識を回復しだした彼の上にかがみながら、ボオイの持ってきたらしい琥珀色こはくのグラスを彼の唇に押しあてた。彼はそれを一息に飲み干した。

「……………？」

彼はその親切な西洋人たちにどんな言葉で感謝を示したらいいのか分らなかつたので、ただにっこりと笑って



見せた。

その時彼の額へ手をやっていたその細君らしい西洋婦人がひよいとうしろを振り向いたので、その方へやっとな頭を持ち上げながら彼も見てみると、ホテルのポオチのところにとろしイとその妹は、ちようどホテルへ遊びにでも来ていたと見える彼女らの友達らしい五六人の少女たちに取りかこまれていた。そうして一種の遊戯かなんぞをしているように、とろしイの説明を聞こうとしていくつもの金髪を一とところに集めているそれらの少女たちの姿は、まだすこし頭の痺しびれている彼には、あたかも

葡萄<sup>ぶどう</sup>の房<sup>ふさ</sup>のようにゆらゆらと揺れながら見えた。……

……ここにこうして居ると、そういう数年前の光景の一つ一つが、妙に生き生きと彼の心のなかに蘇ってくるのは、どういう訣<sup>わけ</sup>かしらと考えるたびごとに、彼はこの樹蔭に何かしら一種特別な空気のあることに気づかないではなかったけれど、つい面倒くさいので彼はそれをそのままにしておいた。だが、ある日のこと、いくらか気分のよかった彼はその原因を調べてやろうと思ひ立った。そこの樹蔭は奥へ行けば行くほど彼が名前も知らな

いような雑草が茂るがままに茂っていた。これはきつとこの雑草の中に何か特別な香りを発するものがあって、それが彼の記憶を刺戟しげきするのかも知れないぞと思った。そこで彼はこの雑草のなかを鼻孔をひろげながら出たらめに歩き廻ってみた。なるほど、何かが特に強く匂っている。——それを嗅いでいると、なんだか気持がすうすうしてくる。おや、おれはまた脳貧血をやりそうだぞ、と彼がちよつと錯覚を起しかかっただくらい、その香りは彼の発作の直前の気持を思い出させる。こいつだな、と思つて彼はその香りをたよりに、その香りの生じていそ

うなところをむぎになって捜したけれど、それが一面に茂っている雑草のどの辺であるのかすら一向に見分けがつかなかった。だが、その香りはどこかしらからますます鮮明に匂ってくる。彼はそこにぼんやり佇たたずんだまま、何となく自分が盲目になったような感じさえ持ち出した。……

だが、彼は遂にその香りの正体を捜しあてた。彼の足が偶然にもそれを踏んづけたのである。彼の足もとには、暗緑色の細かい葉をもった草が一かたまりになって密生ちりめんしていた。その一つを手折たおって見ると、その葉は縮緬しわの皺しわ

のようにちぢれていて、それが目にしみるほどの強烈な光りを放っていた。何かの匂いに似ていると思ったけれど、どうしてもそれが思い出せなかった。彼はそれを叔母のところへ持って行った。

「叔母さん、これ、何という草だか知っていませんか？  
これですよ、僕にドロシイのことを思い出させるのは……」彼は二三年前の発作のことを思い出しながら言  
った。

叔母はそれを手にとって見てちよつと嗅いでいた。

「なんだか薄荷はっかみたいな香りがするわね。薄荷草という

のじゃないこと？」

「あ、そう、そう、こりあ薄荷のにおいでしたね……」  
彼が発作を起すときの何となく快よいような気持は、  
ちようどこのにおいを嗅いでいるときの気持にそっくり  
であることに彼はいま始めて気がついたのである。それ  
は彼には一つのすばらしい発見のように思われた。

まだ八月の半ばを過ぎたばかりなのに、もう秋風らし  
いものが周囲の木の葉をさわさわ揺すぶっているのを耳  
にひやりと聞きながら、ある朝、彼が二階のベッドの中

でいつまでもぐずぐずしていると、突然戸外でマグネシウムを焚たいたような爆音がした。それと同時に家全体がはげしく動揺した。

「浅間山よ……早く来てごらんなさいよ」階下のヴェランダで叔母が叫んでいるらしかった。

彼は寝間着の上に上着をひっかけてヴェランダへ降りて行った。

「僕はまた写真屋がマグネシウムでも焚たいたのかと思っただ。それにしても朝っぱらから変だと思っただけれど……」なるほどヴェランダからは、浅間山がその花キャベツ

に似た噴煙をむくむくと持ち上げている何とも云えず無気味な光景がはつきりと見えた。その無気味な煙りの中には、ときどき稲妻いなずまのようなものが光っていた。その閃光せんこうは熔岩ようがんと熔岩とがぶつかって発するものだけということ、を、去年の夏、彼は人から聞いていた。

彼はその凄すさまじい噴煙を見上げながら、ちようど今の自分と同じようにそれを見上げていた去年の夏のまだいかに健康そうだった自分の姿をひよつくり思い浮べた。そうしてそれに比較すると、今の自分の方がかえって夢の中にでもいるような気がしてならなかった。……



もうヴェランダはうすら寒かった。

彼は客間には行って行きながら、こんな朝はもうだんろ暖炉を使うのも悪くはないなと思った。彼はこの別荘に来た時から、その客間の片隅に古い熔岩を組み合せてこしらえられてある山家らしい暖炉に目をつけ、それを一度使ってみたいと始終思っていたのである。それで、その朝、とうとう彼は女中に言いつけて松の枝をどっさり持つて来させた。そうして自分で暖炉の前にしやがみ込みながら、それを焚きつけにかかった。

やっとその小枝に火が燃え移って、ぱちぱちとそれが

快活な音を立て出すと、叔母も自分の椅子をその火のそばに近づけた。

「そうしているところは、あなたもずいぶん丈夫そうになつてね」叔母が言った

「そうですか。——でも、もうかれこれ一年になるんですからね……ねえ、叔母さん、僕ね、去年二回喀血かっけつしたでしょう。……最初の時は、どういふもんだか気持がよかつたくらいでしたよ。そりや何しろ生れて始めてなので、びっくりしたことはびっくりしたけれど、もうこのまま死んで行くのだと思つたら、かえって落着いてしま

ったのでしようね。……だけど、二度目のときはほん  
に厭いやだったなあ。——あの時はもう、ひよつとしたら助  
かるかも知れないという気がしていたもんだから、かえ  
って慌あわててしまって、僕は無理矢理に咽のど喉から上げてく  
る血を半分ばかり飲み込んでしまったんだからなあ。そ  
のあとの気持の悪いったらなかつたし、医者には叱しかられ  
るし……僕はあの時くらい人間の生きようとする意志を  
醜みにくく思ったことはないなあ……」彼は何時かひとりごと  
のように言いつづけていた。が、ふと彼のそばに叔母が  
何だか煙けむったような顔をしているのに気づくと、彼は強し

いて口をつぐんだ。そうして一本のくすぶっている小枝をいじくっていたが、その様子にはどこか言いたいことがどうしても言えないでそれをもどかしそうにしているようなところがあつた。恐らく彼は叔母に向つてこう言いたかつたのかも知れない。……「叔母さん、そんなに僕が生きていればいいと思ひますの？」……

そうして二人はそのまましばらく黙っていた。

そのうちにさつと何かが木の葉の上に降ってくる音がし出した。それは乾いた雨のような音だった。

「浅間あさまの灰かな？……」叔母はそうつぶやくと、そつと

立上って窓ぎわへ寄って行った。



日本文学電子図書館

---

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行

---



日本文学電子図書館